Museum News

絵：柳田 基

2025 展覧会

企画展

美術と文芸シリーズ

十河巌（そごうがん）がつくる文化の庭

―戦後の大阪朝日会館とアートプロデュース―

2025.10.20㈪▸12.13㈯

※詳細は4ページをご覧ください。

平常展

関西学院が育んだ画家たち
原田の森1889-1929

特集陳列

新収蔵品　合羽摺の蔵書票

2026.2.16㈪▸4.25㈯

休館日：日曜、祝日（ただし3月22日㈰は開館）、
3月23日㈪

関西学院は1889年、原田の森（現・神戸市灘区）に創立されました。ここで学んだ学生には、神原浩や大森啓助などのちに画家として活動した人物がいます。平常展では、創立から1929年までの原田の森時代の歴史とともに、その時代に在籍した画家たちに焦点を当てます。

特集陳列では、当館収蔵の蔵書票コレクションのうち、2024年度に受贈した平塚昭夫の作品を通して、日本の版画技法である合羽摺についてご紹介します。合羽摺は型染版画と同じ手法で地色を染めた上に、ステンシルの手法で細かい模様を施します。

コレクション形成の難題

さまざまな博物館との提携

関西学院は、京都・奈良の国立博物館、国立国際美術館、京都国立近代美術館、兵庫県立美術館、横尾忠則現代美術館と提携しています。学生証や職員証の提示でコレクション展の入館が無料になったり、特別展が割引料金になったりするので、利用している方も多いのではないでしょうか。学生ほどではありませんが、教職員にも割引が適用されるので、私もたびたび利用しています。実は今年度から副館長として大学博物館に関わるようになりましたが、こちらへ着任する前は長らく京都国立博物館で染織担当の研究員を務めており、提携する学校からの来館者（キャンパスメンバーズ）を迎え入れる立場でした。その経歴からも、多くの方に積極的に使っていただきたい提携の特典です。

国立博物館と大学博物館のコラボレーション展

今夏私はこの特典を利用し、奈良国立博物館で開催されていた特別展「世界探検の旅―美と驚異の遺産―」を観覧しました。天理大学附属の博物館施設である天理参考館の収蔵品から選りすぐった作品を中心に、随所に奈良国立博物館の所蔵品を織り交ぜて構成された、天理大学創立100周年・奈良国立博物館開館130年を記念するコラボレーション展です。仏教美術を専門に展示する奈良国立博物館ではまず見ることのないエジプトやメソポタミアの考古遺品、アジア、オセアニア、アメリカ大陸などの生活道具とそこに息づく信仰の造形は、総数220点という豊富な展示点数ともあいまって、世界各地の人間の暮らしを身近に感じさせるものでした。これらの作品は、天理教を新たな地域へ広めるにあたって、その地の言語だけでなく風俗や習慣を知ることを目的に1930年から集められたもので、全体数はおよそ30万点にも及ぶそうです。桃山時代、キリスト教の伝道のために日本を訪れたイエズス会の司祭たちも日本の状況をつぶさに書き記した手紙を本国へ送っていましたから、布教の基本はいつの時代も他者を理解しようとする姿勢にあることに思い至ります。

コレクション形成と収蔵庫

この展示を感心しながら観覧しつつ私の頭をよぎったのは、これらのコレクションを収蔵するための広大な収蔵庫のことでした。日本とは異なる気候の地域で製作された品がふんだんに集められていますし、箱などに納まらない形状の品も多そうですから、温湿度管理や作品の配架にはかなりの工夫が必要に思えます。基本的に収蔵品は増えていくばかりですから、長い歴史の中では幾度も増築を行う必要があったのではないでしょうか。

ひるがえって関西学院大学博物館の収蔵庫を眺めてみると、2014年の開館から本年で11年目を迎えますが、古くからの学院の所蔵品に多くの寄贈品が加わり、配架スペースはすでに半分以上が埋まっている状況です。博物館には、保存管理・調査研究・展示教育などの役割がありますが、その根幹となるのは、やはり作品を保存し次世代へ伝える機能です。とてもありがたいことに、大学博物館には様々な方から作品寄贈のお申し出がありますが、収集方針や収蔵スペースとの兼ね合いから、残念ながらそれらのすべてを受け入れることはできないという現状があります。

何を収集すべきか

『博物館開設準備室通信』第３号に記載されるように関西学院大学博物館には収集方針が策定されており、その方針を基盤として作品の受け入れを進めています。しかし、時代の要請によってさらなる方針が追加されるかもしれませんし、収蔵している作品の価値判断が時の流れの中で移り変わることがあるかもしれません。限られた収蔵スペースの中で何を収集し保存して伝えていくのかは本当に難しい判断ですが、常に受け入れ候補作品を吟味し、関西学院大学ならではのコレクションの形成を目指す必要があります。そして、将来的に収蔵庫の増築が必要になる日のためにも、このコレクションの真価を伝える展示を重ねていきたいと思うのです。

（大学博物館副館長 山川曉）

展覧会報告Ⅰ

企画展

カラフル！
日本の蔵書票
—技ひかる小版画の世界—

関西学院大学博物館には蔵書票、豆本、版画など１万点を超える原野賢吉氏のコレクションがあります。本展では、原野コレクションを中心に当館が収蔵する蔵書票を出品しました。

2025.5.19㈪ ▶7.19㈯
※休館：日曜日、6月19日㈭
後援：大正イマジュリィ学会、西宮市
開館日数　53日
入館者数　2,318人

「紙の宝石」
蔵書票とその技法

蔵書票とは、本に貼られる小さい版画のことで、その持ち主を明らかにする役割があります。手のひらに収まるほどの小さな姿から「紙の宝石」という異名をもち、世界中で愛されています。15世紀にヨーロッパで生まれた蔵書票は、明治時代に『明星』や『白樺』といった文芸雑誌を通して日本にもたらされました。以来、メゾチント、エッチング、板目木版、木口木版、型染などさまざまな技法で制作されています。そこで本展では、日本の蔵書票に見られる技法の多様さとそれによる色彩豊かな表現を蔵書票の「カラフルさ」と捉え、技法ごとに作品を紹介しました。

◀前川千帆《西田蔵書》西田峯吉『西田峯吉（鳩笛社）蔵書票集』西田峯吉（出版）、1989 年より

一般に版画は作品を刷る際の版の形式によって凹版、凸版、平版、孔版の４つに大別されます。しかし蔵書票の場合、国際書票連盟の定める版式略記号表に沿って凹版、凸版、写真製版、その他の４つに技法が分類されます。この版式略記号表にならい、本展では10種類の技法ごとに作品をご覧いただきました。例えば同じ木版画でも板目木版と木口木版の作品ではその雰囲気が大きく異なります。浮世絵で知られる板目木版は大胆な色付けが特徴ですが、木口木版は目の詰まった板材を生かして繊細な線刻を施すことが可能です。10種の技法の解説パネルとともに作品をご覧いただくことで、版画に用いられる多様な表現をご紹介しました。

票主や蔵書票作家たち
日本における蔵書票の普及

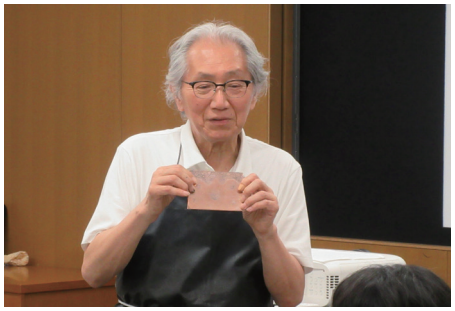
通常、蔵書票は注文者が蔵書票作家に依頼して制作されます。この注文者のことを「票主」と呼びます。蔵書票作家によって作られた蔵書票は票主の手に渡り、本に貼られたり、あるいは票主同士で交換し合ったりして楽しまれています。当館の収蔵する原野コレクションもこうして原野氏により収集されたものです。

日本では明治時代に蔵書票がもたらされて以降、票主たちや蔵書票作家たちによって普及活動がおこなわれてきました。本展ではその中心的人物であった志茂太郎と恩地孝四郎を中心に、蔵書票を取り巻く人びとについても注目しました。恩地が編集し、志茂が発行した愛書家雑誌『書窓』や蔵書票が貼られたカレンダーである書票暦など、蔵書票の関連資料からは恩地をはじめとする創作版画運動の画家たちが蔵書票の普及に携わっていた様子がうかがえます。

あわせて蔵書票の選集である書票集を展示しました。票主が自ら編集した書票集のなかには、前川千帆や川上澄生、棟方志功といった著名な版画家による蔵書票が収められたものもあります。こういった資料からは蔵書票が本に貼る本来の用途のみならず、さまざまに楽しまれていたことが見てとれます。

実際に見てみよう
刷りのデモンストレーション

会期中の6月13日（金）には銅版画家で東北芸術工科大学名誉教授の若月公平氏をお迎えして、開催記念イベント「銅版画の蔵書票ができるまで　解説＆刷りのデモンストレーション」をおこないました。若月氏はエッチングやアクアチントを用いて主に自然をテーマに制作している画家で、本展では原野コレクションにある若月氏の作品を展示しました。イベントの前半では若月氏の創作活動や制作背景についてお話しくださいました。



▲イベントの様子　若月氏。

会場には小型プレス機をはじめとする銅版画の道具を用意し、版を彫る工程と刷る工程を実演いただきました。彫る工程では若月氏の手元をスクリーンに投影し、刷る工程では参加者がプレス機を回すなど、版画の制作過程を体感できる内容でした。

本展を通して、日本の版画の歴史、とくに創作版画運動と蔵書票の深い関わりをご紹介しました。当館では引き続き原野コレクションをはじめとする蔵書票の調査を進めてまいります。

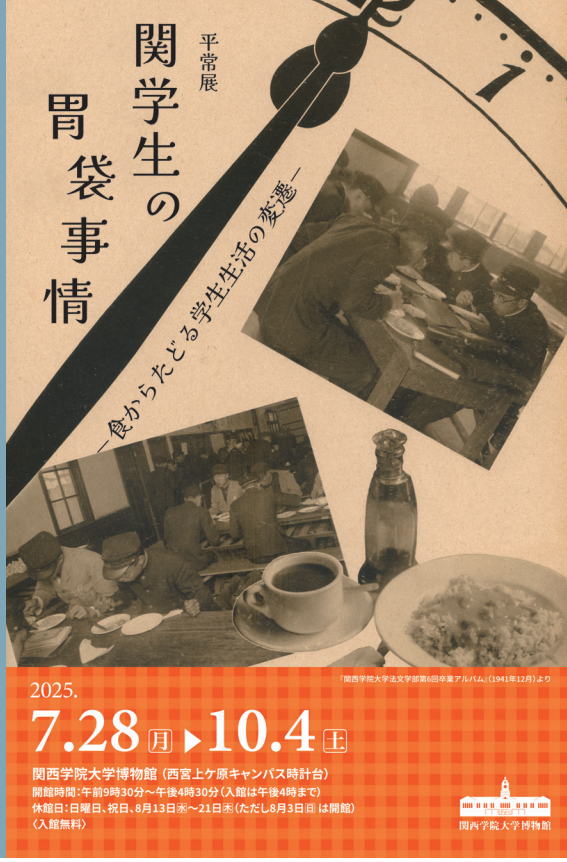
展覧会報告 II

平常展

関学生の胃袋事情
―食からたどる学生生活の変遷―

関西学院大学（前身校を含む）の学生生活の歴史について、食堂とメニューを中心にご紹介しました。

2025.7.28㊊ ▶ 10.4㊏
※休館：日曜日（ただし8月3日㊐は開館）、祝日、
8月13日㊌～8月21日㊍
開館日数　50日



大学博物館は年に数回、「平常展」という展覧会を開催しています。当館を訪れてくださる皆様とともに本学のあゆみを振り返り、未来を築く礎としたいと考えています。

食堂とメニューの変遷を中心に

学生の胃袋の歴史に着目

勉学や研究、課外活動などの学生生活を送る上で、飲食は欠かせません。そこで今回は、関学生が胃袋を満たしてきた食堂の歴史に着目しました。

1889年、神戸東郊の原田の森（現在の神戸市灘区王子公園付近）に学院が創立しました。原田の森は市街地から離れており、閑静でした。また西宮上ケ原キャンパスも、1929年に移転した当時は近隣に飲食店がありませんでした。学生総会における学生食堂に関する意見交換や、関西学院大学生活協同組合の設立などを経て、学内食堂の整備と拡充が進みました。

本展では実物資料50点を出品しました。資料の例として、食堂の食器、店舗やメニューの写真が収められている卒業アルバム、人気メニューが掲載されている学生生活案内の冊子が挙げられます。そのほか、パネルや映像、タブレットでも、店舗やメニューの写真をご紹介しました。

▲展示室の様子

学院の学生生活史に欠かせない老舗

原田の森時代から愛される飲食店

原田の森キャンパスの周辺に飲食店が集積したのは1920年代です。小金丸勝次（1906-1989頃、1924年旧制中学部卒）の絵画《原田乃森 関學生時代の思ひ出》から、当時の学生が利用した飲食店がわかります。原田の森キャンパスの正門前にあった商店街には、東京庵（とうきょうあん）が店舗を構えていました。

学院が1929年に上ケ原に移転すると、東京庵は学生会館内で営業を始めました。1940年代は学外（現在の大学院1号館の東側道路の向かい側）にも洋食を提供する店舗がありました。1978年に学生会館が焼失し、東京庵は上ケ原六番町で営業を再開しましたが、1984年に学生会館新館が竣工すると学内でも営業を再開しました。東京庵は「とんきん」という通称で、現在も関学生に愛されています。本展では、2024年に体育会の学生が注文した際に使われた伝票と、それに書かれたメニューの写真を展示しました。

卒業後も残り続ける思い出

思い出のメニューアンケート

本展にちなみ、2025年4月1日から10月4日まで、学内やキャンパス近隣の飲食店に関する思い出のメニューを募集しました。125名（館内の紙アンケート70名、館内のQRコードまたはウェブ回答43名、口頭12名。年齢は10代以下5名、20代21名、30代11名、40代13名、50代28名、60代33名、70代4名、80代以上1名）にご回答いただきました。厚くお礼を申し上げます。

思い出に残っている店舗は生協食堂（BIG MAMAなど）が最も多く、三田屋、東京庵、生協喫茶部と続きました。思い出のメニューの1位はジンギスカン（生協食堂）（18票）です。思い出に残るメニューとは単に美味しかっただけではなく、食べた時の印象や背景が関係していることがうかがえます。ジンギスカンの場合、「熱々の鉄板」や「羊肉」が印象深かったようです。2位は鉄板ステーキ定食（三田屋）（14票）とチキンバターラーメン（生協食堂）（14票）で、いずれも「ご褒美」や「先輩の奢り」に関する思い出が目立ちました。

体育会に関連する回答も多く、練習前後に生協喫茶部のハヤシライス（1980年代）や東京庵の冷しゃぶ（2020年代）を食べたという回答が寄せられました。体育会の学生は「トレーニングが結構厳しく、毎日お腹がペコペコ」であったようです。

上記のほか、大学生になって初めての食事（「オリエンテーションで隣に座っていた子に声をかけてもらい、一緒に生協食堂でご飯を食べた」、「入学して初めて食べたのがぴり辛チキン丼」）や、遠方から入学した学生の思い出（「マンゴーパンケーキ。宮崎育ちなので、地元を感じるメニューがあってうれしかった」）、米不足の時期の輸入米、ゼミのコンパ、アルバイト先の賄いなど、多くの思い出が寄せられました。アンケートの結果は今後の展覧会で活用します。

▲会場パネルより BIG MAMA のジンギスカン定食（『関西学院大学卒業アルバム』2006 年）

開催中の企画展

美術と文芸シリーズ

十河巌がつくる文化の庭

―戦後の大阪朝日会館とアートプロデュース―

2025年10月20日㈪～12月13日㈯
※休館：日曜日（ただし11月16日㈰、11月23日㈰は開館）
※川西英《アメリカ博記念》の展示は11月19日㈬まで
後援：朝日新聞神戸総局、社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団、
公益社団法人大阪フィルハーモニー協会、西宮市

大阪朝日会館での十河巌 1953 年

創立から戦前期までの関西学院で青春時代をすごした作家たちを見つめる企画展「美術と文芸シリーズ」の第3弾となる本展では、大阪朝日会館の館長として戦後関西の芸術文化に貢献し、自身も絵や詩などの創作活動をおこなった十河巌についてご紹介します。

朝日新聞社を運営母体とする大阪朝日会館は、中之島に1926年から1962年まであった総合文化施設です。十河は社会部の新聞記者を経て1946年9月から約6年半、同館の館長を務め、阪神間で活動していた学院出身の作家をはじめとする自身の人脈を活かした多彩な企画を催しました。また、関西交響楽団（現・大阪フィルハーモニー交響楽団）や勤労者音楽協議会（のちの大阪労音、現・大阪新音）の設立支援、日本を代表するオペラ作品となる《夕鶴》のプロデュースなど、文化活動の推進者として活躍しました。

「文化の殿堂」と呼ばれた大阪朝日会館について、十河は自身の詩作で「文化の庭」と表しています。その言葉からは、学生や勤労者など一般民衆が芸術に親しめる場所を作ろうとした思いがうかがえます。本展では画家の肩書きを持つ十河自身の創作活動にも触れながら、公演ポスターや写真資料などから彼が手がけた芸術文化事業の足跡をたどります。

本展の開催にあたり、ご協力を賜りました関係者の皆さまに厚くお礼を申し上げます。

【展示構成】

Ⅰ 大阪朝日会館と関西学院の作家たち

十河が朝日会館で率いた事業を中心に学院出身の作家と会館の関わりをご紹介します。

《魚とレモン》吉原治良 1928 年頃

Ⅱ 芸術団体と鑑賞団体の設立支援

終戦直後の混乱した状況のなかで、朝日会館は関西の芸術文化を発展させる礎を築きました。

ポスター「関西交響楽団第1回演奏会」
朝日新聞文化事業団 1947年4月26日・27日
（所蔵：公益社団法人
大阪フィルハーモニー協会）

Ⅲ 十河の創作活動

十河は絵画や陶芸、詩、脚本など、幅広い創作活動に取り組みました。

《快い抵抗》十河巌 1975 年頃

【開催記念講演会】

「十河巌と朝比奈隆ー協同の場としての朝日会館、そしてその外へー」

講師：小味渕 彦之 氏
（同志社女子大学准教授、
豊中市立文化芸術センター総合館長）

日時：2025年11月6日㈭
13:20～15:00
会場：西宮上ケ原キャンパス
大学図書館ホール
※事前申込不要、参加無料

【開催記念イベント】

「ALL KWANSEI ORCHESTRA 秋の中央講堂コンサート」

主催：関西学院交響楽団、
関西学院交響楽団OB 会
演奏：ALL KWANSEI ORCHESTRA
後援：関西学院大学博物館
講師：小味渕 彦之 氏
（同志社女子大学准教授、
豊中市立文化芸術センター総合館長）

日時：2025年11月23日㈰
14:00開演
会場：西宮上ケ原キャンパス
中央講堂

交響楽団の定例コンサート内で、十河と関わりがあった大澤壽人作曲の《路地よりの断章》（抜粋）を解説付きで演奏していただきます。
※事前申込不要、参加無料
※当日は開館時間を10:00 ～ 17:00
（入館は16:30まで）に変更します。

展覧会図録　800 円（税込）
200 点を超える写真資料や研究者によるコラムを所収。戦後関西の芸術文化と十河の関わりを俯瞰できる 1 冊です。

関西学院大学博物館通信 第 19 号
KGU MUSEUM NEWS No.19
2025.10.20
関西学院大学博物館
〒662-8501
西宮市上ケ原一番町 1-155
TEL 0798-54-6054
URL https://www.kwansei.ac.jp/museum